

多角的に
「働くこと」を思考する。
大人と高校生の
哲学対話



「自分らしく働く」って 必要ですか？

未来の「働く自分像」を描けるように、高校現場では職業人講話などを通じて生徒に働きかけてきました。見聞きし、読んだ働く大人の話を、自分自身と結びつけて思考を深めるためには？ 小誌は哲学対話の実践者である松川えりさんと地域の大人たちの協力を得て「働くこと」についての哲学対話を実施しました。高校生が対話を通して思考した様子をレポートします。

「働く」を等身大で考える



企画・ファシリテーター

松川 えりさん

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 特任研究員を経て、フリーランスで哲学カフェなどの企画・進行を行う。通称“岡山のてつぐやさん”。

自由に話し、聞き、考える。対話が始めれば誰もが対等。哲学対話とは、身近なテーマを題材に、対話のプロセスを通じて思考を深めるものだ。その発祥は1970年代にアメリカで始まった「子どものための哲学」まで遡る。テーマに対して、さまざまな立場・角度から、問いや考えを交換する。その場ですっきり正解が出るものではないため、自ずとモヤモヤが残り、対話後も思考が深まることが多い。

どんな道筋を辿るかは参加者次第で、進行役が知識を提供するセミナーとも、決められた手順で結論を導き出すグループディスカッションとも違う。よって、一つのテーマに対して多様な論点があることや、異なる他者との意見交換に必要な姿勢を学ぶことができると期待されている。昨今、教育現場でも哲学対話への関心は高まり、総合的な探究の時間に取り入れる学校もある。

この哲学対話の手法を用いて、高校生が多角的に「働くこと」、そして自分の進路について考えるため、哲学プラクティショナーの松川えりさんに協力を仰いだ。松川さんは「哲学対話は、具体的な経験から語る事が大事」と話す。経験のない高校生が「働く」を思考

するための懸け橋が必要と考え、さまざまな職業の大人の方をお呼びした。手順はまず大人が経験に基づいて対話を行う。次に、大人の経験を思考の土台として、生徒たちが「自分らしく働くこと」について考え、最後に全員で対話する構成とした。自由に思考するために、そして自分らしく働くのがいいこと、という前提にならないよう「自分らしく働く『って必要?』」の問いで、3時間の対話を行うことにした。

当日は、岡山県立和気閑谷高校から高校2年生の生徒5人、そして年齢も立場も異なる大人5人が集まった。緊張気味の参加者たちは、飲み物を片手に着席。机の上には紙と色とりどりのペンが置かれ、対話中に呼ばれたい名前を書く。これも「無機質な“会議感”を出さないための演出」と松川さん。今回は感染症対策のため使用しなかったが、発言者の指名に使う毛糸のボール(コミュニティボール)も置かれた。こうして対話の前には、自分の経験で語れるテーマの設定や、自由に思考できる雰囲気演出など狙いに沿った下準備を行う。



「働く大人」が対話

時間配分の例(3時間の場合)

冒頭20分で哲学対話の説明 → 対話30分



テーマ

働いていて「自分らしい」と思う瞬間はありますか？

安心して思考できる空間に

「自分がどう思うかを大事に。対話のプロセスを楽しんで」「予想外の展開を恐れなくて。それは自分が知らないことを知れるチャンス」。冒頭20分弱かけて、松川さんが参加者全員に向けて、哲学対話とは何か、対話にどのように参加してほしいかを説明した。「発言するかしないかは自由です。パスしてもいい。ここでは誰もが対等で、もし話についていけなかったら『今ちょっと話に乗れていないです』と試してみるのもあり。すると『なぜ話に乗れていないか?』と新しい角度から考えることができる。慌てて答えを出すのではなく、モヤモヤする気持ちを大切にしてください」(松川さん)。今回の場は合意形成することが目的で

ほんとうは自由な仕事があったんです。ふらっと海外に行くとか(笑)。私が就いた消防士という仕事は、真逆で…。

消防士 もりしさん
現在は消防総務課にて勤務

思い描いていた「働く」と違うことも

規律を重んじる雰囲気、集団行動が求められた。ところが、それが性に合う気がしたんです。働き始めてから「これが自分らしい」と知ったのかな。



人と話すことが好きです。だけど集中治療室に配属になり、思い描いていた「会話のある職場」ではなかった。今は、「自分」が出せなくて窮屈に感じることもあるけど、この職場でもう少しがんばりたい。

新卒1年目の看護師
あやねさん
和気関谷高校卒業生

※参加者のお名前は、ワークショップ中の呼び名です。

隣に誰がいるかだけで変わる。
「職業」では語りきれない。

はないと伝え、参加者が安心して考えられる空間をつくりあげていった。

説明を終えると、まず大人たちだけの対話を始めた。松川さんが投げかけたのは自己紹介ではなく「働いて『自分らしい』と思う瞬間はあるか」。大人たちは自分の職業やキャリアを明かしながら、仕事の中での「自分らしさ」について、率直な考えや葛藤を語り出した。

複数の問いが交差する

最初は「自分らしく働きたいから自営業を選んだ」と話す理容師の方のお話、会社や組織に所属する他の参加者たちが「羨ましい」と反応した。しかし、徐々に「自分の個性を活かしてくれる組織もある」「集団の一部として働くことを自分らしいと感じる」「個人経営でも完全に自分次第ではない」などさまざまな観点から、生々しい経験談が飛び出した。進行役は参加者の一人として意見を言いつつ、たびたび「例えばどういうことですか？」などと問いかける。

途中、話が時代や世代の傾向に及びそうになった。すると、松川さんが「せっかくなので、具体的なあなたの経験を聞きたい」と言葉を挟み、対話の流れを変える。働くことに関する多



挑戦を求められる社風で、その人の「らしさ」を生かした活躍ができます。

教育系の事業に携わる
あいさん
ご自身も子育て中

そういう会社だって知って入ったわけじゃないけど自分の「～したい」を生かしながら働けるって、幸せだったんですね。

自由に働きたいから自営業を選んだ。では組織と無縁かというところでもないんだな。組合に所属しているとか…。



組織に属して、自分の自由や働きやすさを守っている一面もある。

理容師 アナログさん
和気開谷高校卒業生

一人では働けないと知った



教師という職業はひとつだと思っていました。でも実際は、先生が一人入れ替わるだけでも、職員室の雰囲気は変わるんです。

小学校教諭 ぞうさん
現在は教育委員会に在籍

種多様な論点が出てきて、話はあちこちへと展開した。この間、生徒たちは大人と同じ輪の中で、対話の様子をじっと観察している。

したいことを仕事にするだけじゃなくて、向いているか、向いていないかも大事なのかな。

その人の「らしさ」を尊重してくれる職場っていいな。指示をしてもらったほうが動きやすいか、任されたほうがいいか、人それぞれ違うと思うから。

自分らしさって何なのか、よくわからなくなってきた…。僕なら窮屈さを感じながら働き続けるのはつらい、って考えると思う。



ファシリテーションのポイント

主語を「社会」にせず個人個人の経験を聞く

冒頭は、あえて「自己紹介してください」から始めず、対話のテーマに対する考えとその人自身、どちらもが垣間見えるような問いを投げかけてみました。第一声や冒頭の展開を、事細かに決めておく必要はありません。既に決まっていることを淡々と遂行するように見えてしまうと、対話も予定調和に陥りがちです。

途中、「時代」や「社会」を主語にした話が続いたときには「あなたの経験を基に話してほしい」と伝えました。時代や社会の変化は一般論で語られがちですが、それが全員の共通認識というわけではありません。その人がどのような経験からそう感じたのか話してもらおうほうが、年代の異なる人も理解しやすく、一緒に考えやすくなります。

複数の人の発言のなかで交わりそうなポイントが見えたら「これと、さっきの話は関連しますかね？」などと指摘してもいいかもしれません。私はこのポイントを「思考や関心の交差点」と呼んでいます。異なる経験のなかで交わりそうだと感じた点に、スポットライトを当てるイメージです。そこを入りに、思考が深まる場合もあります。参加者に考えたい様子がなければ、別の話題に移っていきます（松川）。

高校生が対話

時間配分の例(3時間の場合)

対話40分 → 休憩20分



テーマ

大人の対話で、 何が印象に残りましたか？

自分ごととして「働く」を 語り出した生徒たち

次は高校生を中心に対話を始める。松川さんは「大人たちの対話で印象に残ったことは？」と聞いたが、生徒たちからは「自分自身はどう働きたいか」といった話が出てきた。大人たちの対話を「自分ならどうするか」と考えながら聞いていたのかもしれない。大人も真剣に悩んでいるとわかって、自分もこのテーマを考えてみたくなったのだろう。

自分の進路について話す生徒もいれば、「自分が『自分らしい』と感じる瞬間」について、高校生活での経験、集団の中での役割へと話を広げる生徒も。それぞれに違う視点での話が続く。「今の話を聞いて思うことはある？」と松川さんが促すと、すぐに話し出す生徒もいれば、なかなか口を開か

以前は保育士になりたいと思ってたんです。子どもが好きだから。

でも甥っ子が生まれたのをきっかけに「子どもが好き」だけでは保育士の仕事は務まらないかもと思うようになって…。

「好き」と 「仕事にする」は 違う？

私は子どもを育てているけど、そんなふうを考える人が保育士さんだったら嬉しいけどな。



ない生徒もいる。途中から、次に話す相手を指名する形で対話を進めたが、松川さんは「話すのも話さないのも自由。指名されたタイミングで話したくなかったら『今はパス』と言っていいからね」と繰り返す。生徒の考えに対して、大人が異なる見地から意見を述べる場面もあった。

休憩時間には、大人と生徒が入り混じり、会話が盛り上がった様子。休憩終了後は、生徒たちもだいぶリラックスした表情になっていた。

「自分らしさ」はどこで発揮できる？

自分でアイデアを出して、自分で行動することが好きだから、自営業とかのほうが向いてるのかなって思いながら最初は聞いていました。でも組織の中にも、自分らしさを発揮する方法はあるのかな。



ファシリテーションのポイント

思考は外から見えない。沈黙を恐れなくて

高校生に「自由に話して」というと、沈黙が続いてしまうこともあるかもしれません。沈黙には2種類あります。1つ目は言いたいことがあるのに遠慮して生じる沈黙。2つ目は「考え中」の沈黙です。ずっと沈黙していて退屈そうに見えても、頭はフル回転している、という場合もよくあります。その場合は、無理に発言を促す必要はありません。

今がどちらの沈黙なのかわからない場合は、率直に聞いてしまってもいいでしょう。「遠慮しているのか、考え中か、どちらですか?」と。もし遠慮していると言うなら、「どうぞ話して」と促します。

時には、一人の人がずっと話し続けてしまうこともあるでしょう。あまりに話す人が偏りすぎるときは「あの人の話も聞いてみたい」と伝えることもあります。

今回は3時間の長丁場だったので、間に20分の休憩を入れました。もし全体が1時間半程度でも、参加者が緊張している場合は休憩を入れるのがおすすめです。対話の時間よりもカジュアルに、参加者同士が話せる機会にもなります。実際、今回の対話でも「休憩以降に話しやすくなった」と話した高校生がいました。緊張をほぐすためにも大事な時間です(松川)。

全員で対話

時間配分の例(3時間の場合)

60分で対話 → 10分で感想



テーマ

現時点で「自分らしく働く」ことは必要だと思いますか？

自分ごととして「働く」を語り出した生徒たち

最後に、大人と高校生が入り混じり「自分らしく働く、は必要か」について意見を聞いた。「必要」「不要」「そもそも必要かどうかという問いがおかしい」などと考えが分かれる。この対話中に、大人の中から「自分らしさとは何か」に関していくつか論点が提示された。すると松川さんは、生徒たちに「この問いについて話してみたい？」と問う。生徒たちはあまり乗り気でない様子だ。

参加者が考えたい問いを選ぶのが哲学対話の原則。「考えたい問い」を生徒側が選びながら対話は進行し、次第に話は「自分らしく働くことと、仕事のなかで組織や他者と協調することは両立するのか」といった方向に白

本当に「自分らしい」って、
本気になるのかな？

なぜ自分のクラスだけ派手なことをするのはよくないんですか？



あるとき、ほかのクラスの児童から「先生のクラスだけ、いいなあ」と言われて気づいたんだ。僕のクラスだけよければいいのか？ 学年全体で見るとどうなんだろう？って。



自分らしさを出しすぎるのが、よくない状況につながることもあるんじゃないか？ 自分のクラスだけ派手なことをして、楽しいイベントばかりにするんじゃなくて、学校全体の目標のなかで工夫しないと…。



熱。参加者から「『自分らしさを発揮すること』と『わがまま』は何が違うのか」という問いが出たところで、終了の時間に。「この問いは今日のお土産に」と松川さん。哲学対話に結論は不要だ。参加者たちは「楽しかった」と「モヤモヤが残ったまま」の両方の表情を浮かべて解散した。

与えられた役割のなかでも「自分らしさ」は発揮できる。

組織の目的と自分の目的がクロスする地点を見つけたい。

必要かどうかじゃない。「この仕事が自分に合っていない」と感じたのならそれ自体が「自分らしさに気づく」ということだと思う。

この対話を通じて「自分らしさを発揮すること」と「わがまま」は違う?という問いが生まれましたね。これはお土産にしましょう。



ファシリテーションのポイント

言葉にしなくてもいい。モヤモヤは宝が眠る証

この対話のなかで、高校生の一人が「今、すごく何かを考えている気がするんだけど、言葉で整理できないのでパスしたい」と発言しました。進行役から見えるよりも参加者の頭の中ではさまざまなことが起きています。言語化を重視しすぎると「言葉にできること」のなかで考えるようになります。「いっぱいいっぱい言葉にできない」状態の参加者がいたら、無理に考えを急かさずに、「今すぐ言葉にしなくてもいいし、話したくなったら話してもいいよ」などと受け止めましょう。

言葉で整理できない状態は、モヤモヤするものです。そんな参加者に、私は「モヤモヤした時点で、宝のありかを見つけたようなもの」と話します。モヤモヤするのは、これまで至らなかった考えに辿り着こうとしているから。何かしらの発見がそこに埋まっている証です。

だから、参加者がモヤモヤしたまま対話が終わることを恐れる必要はないのです。哲学対話は即効性のある薬のようなものではありませんが、じわじわと問いが染み渡るように、思考を促し続けます。終わった直後に印象に残った言葉と、1週間後に思い出す言葉が違うこともある。モヤモヤや問いは、その日のお土産にお渡ししましょう(松川)。

対話を通じて高校生が考えた 働いて、たぶん だと思う。

働いて、たぶん自分自身の力を
発揮することだと思う。



みなさん

看護師のあやねさんの「今は窮屈でも、もう少しがんばりたい」って話に驚きました。職場が思い通りではなくてもがんばろうとする姿勢がすごいなあって。私が保育士を諦めた話をしたら大人の方がいろんな考えを話してくれて戸惑いました。まだ考え中だけど「自分自身を発揮することが求められる」場所で働きたいと思います。

働くうちに自分らしさが
自然にあらわれるものだと思う。



ようすけさん

今日の対話を通じて、自分らしさとは、自分から発するのではなく、自然とあらわれるものじゃないかと思いました。だから自分ではわからなくて、他人から見てこそ、わかるものかもしれません。消防士のもりしさんの「集団の中で自分を生かす」という話は、僕にとって新しい発見でした。僕は地域の人との関わりのなかで、自分を生かしてみたいです。

働いて、まだよくわからない。
でも死ぬとき「自分らしかった」と
思えるように生きたい。



ゆうしさん

考えはまとまっていません。看護師のあやねさんの話を聞いたとき「本当に自分のしたいことをすればいいのに」と思ったけど、消防士のもりしさんは「したくなかったことをしているうちに、これが自分らしさかも、と思った」と言っていて、いろんな見方があるんだなって。一つの考えに縛られず、どんな場所でも「自分はどうしたいか」を考えて、選んでいきたいです。

もともと人がもつ
自分らしさがあるから、いい仕事が
できるんだと思う。



ありこさん

何が心地いいか、どんな状態だと自分の能力を発揮できるかは、人それぞれだと思いました。「自分らしさを出す」と「協調する」は両立するんじゃないでしょうか。むしろ自分らしさを生かすことが、いい仕事につながるような気がします。私も自分の特性が生きる場所で働きたいです。

働くって、…少なくとも私は、
自分らしさを生かしたいと思う。



せいりかさん

教師のぞうさんの「目の前の児童だけではなく、学年全体のことを考える」という話は驚きでした。自分を出すのを我慢するより、みんなのために自分らしさを使うほうがいいと思いました。私は、たくさんの人に「自分らしさ」を生かす方法を考えています。でも「働くなかで自分らしさがわかる」って話もあって、いろんな観点で働くことを考えられました。

哲学対話には、
生徒が参加できる
“余白”があった

対話を終えた生徒たちの感想は「楽しかった!」。講演やセミナーなどで仕事の話を書く場合は受け身になってしまいがちだが、今回の哲学対話はそれとは違って参加できる空間だったと話す。「何を言ってもいい、って感じがあった」「高校生の中にもあまり話したことのない子がいて緊張したけど、真剣に考えている子がいると私も考えたくなった」「大人が私の話に耳を傾けてくれて驚いた」という意見も。印象に残ったこととして、職場での悩みを率直に吐露した大人の発言を挙げた人が多く、仕事観が変わった生徒もいたようだ。等身大で考えられるテーマを自分で見出し、思考を楽しんでいた様子が見えかけた。

『学校現場で哲学対話を行うときのポイント』

ファンリ
テーション
のコツ

その1

生徒自身が
考えたい問いを
テーマに

その2

「何を言っても
いい場」と
腹を括る

その3

進行役の
戸惑いや焦りも
オープンに

今回の対話の企画を学校現場で行う場合は、まず全体で大人の話聞いてから、生徒が5人程度に分かれて円になり、対話するのもいいでしょう。そのとき大事なものは「質問したいこと」ではなく「高校生自身が考えたいこと」をテーマとして設定することです。課題文のようなものを読んで生徒一人ひとりが問いを考え、一番考えたい問いを選ぶ方法もあります。先生が進行役を務める場合は、「ここからは先生という立場ではなく、一人の大人として参加します」などと話して、いつもとは違う関係であることを伝えてください。進行のコツは「何を言ってもいい場である」と本気で腹を括ること。また、話があちこちに行ったり、沈黙が長くなったりして焦った場合は「私、焦っています。誰か助けて」とオープンにするのも手です。哲学の由来は「知を愛する」というギリシャ語。まだもっていない「知」、自分の知らないものの見方と出会うことを先生方もぜひ楽しんでみてください(松川)。

